

第311回くらしの植物苑観察会 令和7年4月26日(土)

「『桜草作伝法』を読む—桜草連(同好会)を中心に—」

水田 大輝 日本大学生物資源科学部

『^{きくらそうきでんぽう}桜草作伝法』(旧字体の「櫻」と「傳」は、以降、新字体の「桜」と「伝」で表記)は、著者不明で作成年代もよく分かっていない写本ですが、文化年間(1804~1818)までを中心に江戸における桜草に関わる歴史や品種、栽培法や鑑賞方法(飾り方)などが詳細に記されている桜草の解説書です。国立国会図書館には、白井文庫由来の写本と伊藤文庫由来の写本があります。今回は、伊藤文庫の『桜草作伝法』に記載されている情報を基に紹介していきます。

『桜草作伝法』の書き出しと品種の出現

『桜草作伝法』の本文は、「桜草と云いならはし候草花、桜花に花形似たればこそ名付しことなるべし。いつ頃より何人の云い習はしに候や・・・(桜草といっている花は、花の形が桜の花に似ているからこそ、そう名付けられたのでしょうか・・・)」の書き出しで始まります(第1図)。その続きには、古い時代にはなかったこと、宮中の人々や東の歌人の歌(万葉集や古今集など)にも出てこないと述べられています。

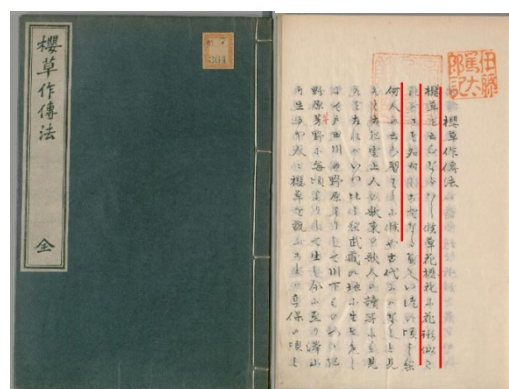
人々が桜草を鑑賞するようになったのは、享保(1716~36)の頃からで、花好きの人は野原へ出かけ、戸田(現在の埼玉県戸田市に流れる荒川の野原)で富永喜三郎という人が見事な絞り花を見つけ、「須磨浦」と名付けた品種が最初のように、名花としてあちこちで植えられました。そののち、花好きの人々は栽培する色々な桜草から種子を取ってまき、変わり花をつくり出しました。そして、^{みしょう}実生(種子から発芽した植物)の変わりものでは、「南京小桜」と名付けた品種が最初で、その後、瑠璃色の「浅桜」や「野田の藤」と名付けられた品種も登場しました。桜草好きの人が増えて実生で変わり花をつくり出すのが盛んになり、天明(1781~88)から寛政(1789~1800)の頃に最も流行しました。

桜草連の誕生と新しい花の評価

そのうち、桜草好きの人々は、独りで楽しんでも面白みに欠けるということで話し合い、文化元年(1804)から下谷(現在の東京都台東区西部)に住む辻 武助が実生由来の花の集会を企画しました。これが桜草連(同好会)の始まりで、毎年、花盛りの八十八夜(5月のはじめ)の頃に集まってこの品評会を楽しんでいたようです。

まず、花の等級は、6段階【1.無極、2.玄妙、3.神奇、4.絶倫、5.雄逸、6.出群】に分けています。集まりでは、一人につき新しい花を3種類出品できます。持ち主が分からないようにして、1種類ずつ出し、出席の会員が各自の評価(等級)を札に記入して投票します。そして、一番多い札の等級に決めます。特に、【無極】の評価は厳しく、仲間内でただ1品種しか認められない決まりです。

【無極】の品種が出て、その後新たな【無極】の花が選ばれた時、最初の【無極】評価の品種の方が見劣りしていれば、それは【玄妙】評価に降格させねばなりません。なお、投票である品種



第1図.『桜草作伝法』の表紙と本文書き出しの頁(国立国会図書館デジタルコレクションより引用)※赤線部は、本文の下線部と一致する箇所

が【玄妙】3枚、【神奇】3枚と同数の時は、下位の【神奇】評価にする決まりです。

桜草連で最初の【玄妙】と【無極】の誕生

文化（1804～18）の頃、最初に【玄妙】として選出されたのは、‘二重蔓’と名付けられた、筋に染み出し大輪の猪口かかえ（抱え咲きか）と紹介されています。この品種は名花と評判で、のちに‘玉蘭花’とも名付けられる珍しい扱いとなりました。続いて、裏紅大輪の‘万里の響’という品種が生まれ、珍花と称賛されました。

文政2年（1819）には、裏薄紅の‘七宝充滿’と名付けられた品種が、話し合いの結果、【玄妙】より上位と決まり、最初の【無極】が誕生しました。続いて、次の回にも‘智仁勇’と名付けられた裏紅でかなり大輪の品種が現れました。どちらの品種も甲乙つけがたいということで、初めの決まりに反して【無極】が2品種になったとのことです。この後、【無極】の品種もあちこちで生まれ、数が増えていきました。

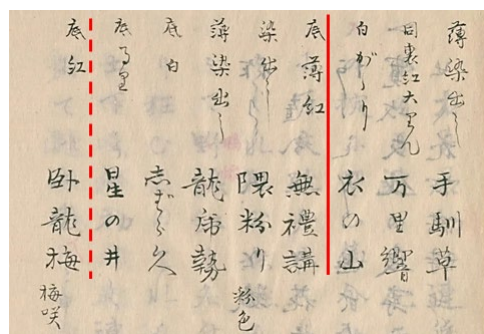
3つの桜草連が出現

辻 武助が文化元年（1804）に開いた集会在下谷（東京都台東区西部）で始まったので、この連を「下谷連」と呼び、のちに一番側といいました。また、文化2年（1805）には、築土で下谷連の決まりに倣って集会が始まり、この連を「築土連」と呼び、下谷連ではこれを二番側と呼んでいました。また、文化9年（1812）には、同じく下谷連の決まりに沿って「小日向連（東京都文京区）」がつくられました。なお、これらの連の他に、個人で実生の変り花（品種）を作って楽しんでいる人が当時は100名以上いたようです。

寛政・文化の頃の品種紹介

『桜草作伝法』には、「連」の説明の後、寛政（1789～1801）から文化（1804～18）にかけて作出・栽培されていた品種の例として65品種が紹介されています。この中には、‘旭の袂’のように現在栽培されているものと同じ特徴が記されている品種もありますが、現在知られている絞り咲きの‘無礼講’や白色花の‘臥龍梅’のように、

『桜草作伝法』では、‘無礼講’が「底薄紅」、‘臥龍梅’が「底紅」と記載されているなど、品種名は同じでも特徴が異なる同名異株も複数見られます（第2図）。



第2図.『桜草作伝法』における品種紹介の頁の一部（国立国会図書館デジタルコレクションより引用）※赤線、赤の点線部は、本文の下線、点線の下線部と一致する箇所

参考文献：浪華さくらそう会誌版＜平成2（1990）年度＞第25号 特集：桜草作伝法 影印・翻刻・現代語訳

.....

次回予告 第312回くらしの植物苑観察会 令和7年5月23日（金）

※平日開催となります。ご注意ください。

「季節を詠う植物と人びとのくらし」

島津 美子（当館研究部情報資料研究系 准教授）

13：30～15：30

くらしの植物苑 東屋 申込不要